

# 資料館だより

第81号

2018.3.1

目次

旧公衆衛生院 建物の改修工事が完成しました ……	1	資料紹介 館蔵都電関係資料 ……	5
川瀬巴水と港区 ～大門を描いた2点～ ……	2	資料館講座 「尾崎紅葉と港区」開催 ……	6
新指定文化財 倉松屋嘉兵衛町屋敷絵図について …	3	親子学習会	
16世紀末の新橋・虎ノ門界限		日本庭園にふれ、ミニミニ石庭(枯山水)を作ろう …	7
- 日比谷入江をめぐる議論から - ……	4		

## 旧公衆衛生院 建物の改修工事が完成しました



完成直前の外観



工事中の旧図書閲覧室

港区立郷土歴史館（港郷土資料館の新名称）が入る、昭和13年（1938）築の旧公衆衛生院（旧国立保健医療科学院）の建物は、平成30年（2018）2月末に改修工事が終わりました。建築当初の外観や、内部の特徴的な部屋と装飾類を残しつつ、新たに入る施設が使いやすいよう間取りが変更された他、耐震改修、バリアフリー化、冷暖房設備の設置など、今日的な要素を導入する工事が行われました。

11月開館予定の郷土歴史館に先駆けて、がん在宅緩和ケア支援センター、子育て関連施設等が4月にオープンします。

郷土歴史館の常設展示はテーマごとの展示になります。また企画展を行うための専用展示室

に加えて、ミュージアムショップやカフェが新設されます。現在の港郷土資料館の「さわれる展示室」も、コミュニケーションルームと改称し展示の充実を図ります。

昭和57年に開館した港郷土資料館は、35年の蓄積を活かしつつ、新たな要素を加えて、場所と規模を変えて郷土歴史館としてリニューアルオープンいたします。白金台4-6-2に位置する郷土歴史館は、地下鉄三田線・南北線の白金台駅から徒歩1分です。気軽に足を運んでいただければ幸いです。

※郷土歴史館の開館日につきましては、近くなりましたら広報・ホームページ等でお知らせします。

# は すい 川瀬巴水と港区

## ～大門を描いた2点～

小澤 絵理子  
(文化財保護調査員)

前号に続き、川瀬巴水の作品を紹介します。

平成29年（2017）9月27日、大門は、港区指定文化財（有形文化財・建造物）となりました。現在の門は、昭和12年（1937）に再建された鉄骨鉄筋コンクリート造のものです。平成28年12月から平成29年3月にかけて、耐震のための構造補強と塗装などの修理の工事が実施されました。

幼少期から慣れ親しんだ場所であることを考え合わせると、この角度や添景を選んだのは偶然ではなく、あえて似た構成を楽しんで描いているような遊び心も感じられます。大正15年の作には自転車、昭和11年の作には自動車や電柱・電線が添景として描かれており、巴水の作品の中では珍しい近代的なモチーフです。



「芝大門」

巴水が大門を描いた作品には、大正15年（1926）作「芝大門」と、昭和11年作「新東京百景／芝大門之雪」の2点があり、当館ではその両方を所蔵しています。

昭和11年の「芝大門之雪」について日本美術史研究者の<sup>ならさきむねしげ</sup>檜崎宗重（明治37年～平成13年〈1904～2001〉）が、「大門のさびた朱色、あたりをこめる雪の色。巴水の好む画題で、成功しないことは少ない」と言っていますが、いずれも、〈赤い建造物に雪や雨〉という、巴水が得意とする組み合わせです。また、どちらの絵も現在の JR 浜松町駅を背に増上寺に向かった斜めのアングルの構図です。巴水にとってこの界限は、いわば「地元」。



「新東京百景／芝大門之雪」

画中に自動車が描かれている作品には大正14年の「代地の雪」、昭和11年の「中央市場」、昭和26年の作である「歌舞伎座」がありますが、「代地の雪」「中央市場」は自動車の一部分のみ、「歌舞伎座」の自動車は主題である建物に比べて小さく影のような描写で、この大門の絵のように画中的存在感は示していません。また、自転車が描かれている作品は「芝大門」だけです。この作では電柱と電線も目立ちますが、いずれも違和感や破綻のない構成だと言えるでしょう。

また、再建前の大門の姿をとどめているという点で港区の歴史を記録する資料としても重要です。

# 新指定文化財

## くらまつ や か へ え 倉松屋嘉兵衛町屋敷絵図について

駒形 あゆみ  
(学芸員)

平成29年（2017）9月27日付で、2件の文化財が新たに港区指定文化財に指定されました。1件は再建から80年を迎え、平成28年には改修工事も実施された大門、もう1件がここで紹介する倉松屋嘉兵衛町屋敷絵図です。

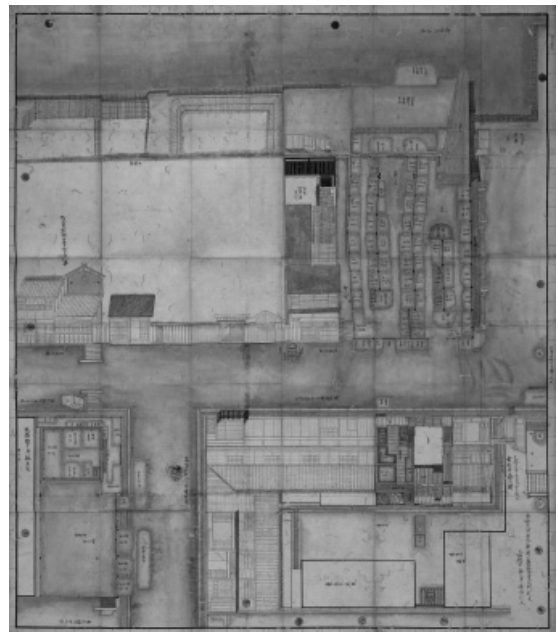
この絵図は、倉松屋嘉兵衛という人物の求めに応じて、棟梁の喜三郎常昌きさぶろうつねまさが作成した町屋敷の絵図で、「文政十二年正月吉日改ル之」の記載から、文政12年（1829）の作図であることが分かります。発注者の倉松屋嘉兵衛は江戸時代の『材木仲買人別帳』に「材木仲買」と記載されており、材木商であったと確認できました。描かれている範囲は、東西28間（約50.4m）、南北32間（約57.6m）と記載されていて、浜松町四丁目横通を中心に、西端には芝浜松町四丁目通四辻が、東端には南新網町南川岸通、南側に金杉川筋通が配されます。これは現在の浜松町二丁目7・11・12・13番に相当します。

絵図には倉松屋の屋敷と土蔵の立面図、屋敷の1・2階と裏長屋の平面図が描かれており、当時の町屋の一例を詳細に知ることができます。倉松屋の周辺には、三河屋徳兵衛、荒井屋甚兵衛、大場惣十郎という三軒の町屋敷の輪郭の他、材木置場・細工小屋、門、井戸、さらには新堀川の護岸や金杉橋の一部など、江戸の町の一画が細かく描きこまれています。この中でも特に注目すべきは、材木置場の材木が、「松丸太類置場」「二尺五分角材置場」など、樹種や加工毎に細かく分けて置かれた様子が表現されている点です。当時の材木商が取扱っていた木材や江戸市中で使用されていた木材、木材の流通を知る上でも大変貴重な資料といえます。

この絵図は、昭和40年代に港区立みなと図書館が入手したものと考えられますが、当時の記録がなくその経緯などは不明です。しかしながら入手

当初から、武家屋敷や寺院ではない町屋敷が描かれた絵図は港区域では他にない上、全国的にも珍しいものであり、保存状態も良好であると認識され、『港区の文化財・第8集 新橋・愛宕山付近』に「金杉川口河岸の町屋絵図面について」として、当時の文化財調査委員加藤角一氏が詳しく紹介しています。その後時を経て、港区教育委員会が改めて調査を行いました。その調査結果を踏まえ、港区文化財保護審議会によって審議され、指定にふさわしい文化財と認められるに至りました。ただし、名称については、金杉川口町という町名は、絵図が描かれた時代使用されていなかったこと、描かれた範囲に複数の町が存在し、町名を用いた名称では冗長であることから、発注者の名前を用いた「倉松屋嘉兵衛町屋敷絵図」の名称を用いることになりました。

倉松屋嘉兵衛町屋敷絵図は、今年（平成30年）開館予定の港区立郷土歴史館の展示でも紹介する予定です。



# 16世紀末の新橋・虎ノ門界限

## - 日比谷入江をめぐる議論から -

高山 優

(学芸員)

下の図は、東京都立中央図書館特別文庫室所蔵の「別本 慶長江戸図」です。慶長7年（1602）頃、江戸が本格整備される前の様子が描かれているとされる彩色図で、中央に江戸城が、周辺に武家地や町地などが描かれています。

ところで、この図の下方、やや左に寄った位置に青色で塗られた箇所が見られます（円で囲った部分）。日比谷入江と呼ばれる低地帯で、あたかも海水が入り込んだ湾のように見えるこの図や、江戸時代の地誌などからこの名が与えられました。

日比谷入江は、江戸・東京の歴史を考える上で重要です。江戸初期のまちづくりが、家康の江戸城再整備と日比谷入江の埋め立て造成から始まったと言っても過言ではないからです。しかしその実、家康が江戸に入った16世紀末の頃の日比谷入江の実像は、よく分かっていませんでした。

近年新橋・虎ノ門界限では、日比谷入江の実態解明につながる遺跡発掘調査が続いており、これを機に本館では、考古学、地形・地質学、文献史学の研究者による日比谷入江の検討を始めました。その経過を紹介しましょう。

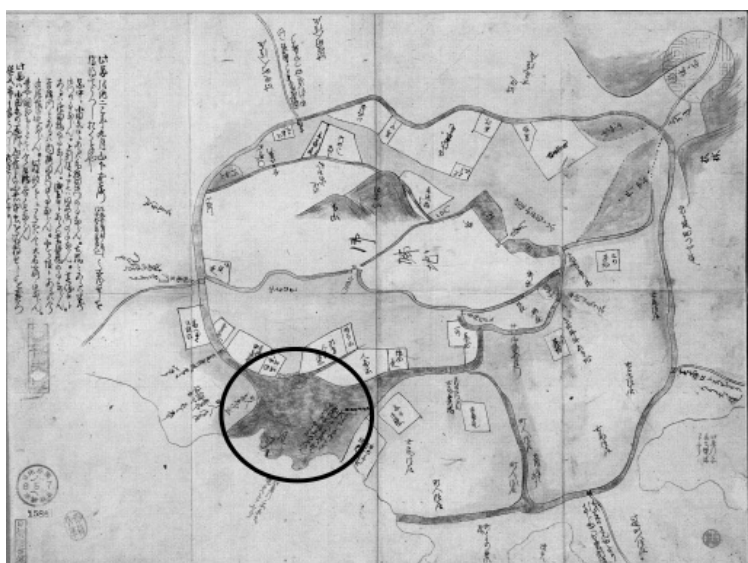
きっかけは、愛宕下遺跡の両側でほぼ同時期に行われた発掘調査でした。

愛宕下遺跡は、平成26年（2014）に開通した虎ノ門と新橋を結ぶ「新虎通り」建設地で発見された遺跡で、日比谷入江の海手側入り口付近に位置しています。その成果を踏まえ、北に位置する近江水口藩加藤家屋敷跡遺跡と南の愛宕下武家屋敷群 - 鎧小路南地区遺跡の発掘調査に臨むに際し、家康入府時の日比谷入江の実態とまちづくりの過程を明らかにすることを目指したのです。

愛宕下遺跡の発掘調査では、入江を横断する方向の土層堆積状態が観察されています。勿論、掘削深度が入江地形の基盤にまで達してはいませんが、少なくとも家康入府時に、海水が浸入するような入江の存在を窺わせる様子は見出されていません。近江水口藩加藤家屋敷跡遺跡では、江戸の初期段階から、遺跡地が何らかの形で使用されていたことを示す資料、情報が得られています。日比谷入江推定範囲の西端に位置する愛宕下武家屋敷群 - 鎧小路南地区遺跡の発掘調査では、土地利用が中世末に遡る可能性が示されました。しかし、

愛宕下遺跡同様、入江地形を示す情報は観察されていません。なお、地形・地質の分析から、日比谷入江が古代にはだいぶ閉ざされた空間になっていた可能性が示され、従って水面低下や淡水化が予測されています。

おそらく日比谷入江は、16世紀末には自然埋没がだいぶ進み、広い湿原のような姿だったのでしょうか。陽に照らされた湿原が、家康の眼には黄金のように輝いて見えたのかも知れません。



「別本 慶長江戸図」（東京都立中央図書館特別文庫室所蔵）

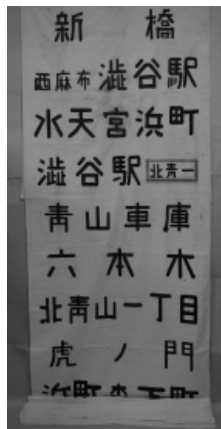
## 館蔵都電関係資料

小緑 一平  
(文化財保護調査員)

都電は、東京の人びとの身近な交通機関として活躍しました。明治末期の東京市内では、東京電車鉄道など3社が路面電車を運行していましたが、3社は明治39年(1906)に合併して東京鉄道会社となり、明治44年には同社を東京市が買収して市電が誕生します。そして、市電は昭和18年(1943)の都制施行に伴って都電となりました。昭和30年の最盛期には、営業キロ数213km、1日あたりの輸送人員175万人を誇りましたが、次第にモータリゼーションの進展や地下鉄網の整備の影響を受けて利用者の減少と採算性の悪化が進み、昭和47年までに荒川線を除くすべての路線が姿を消しました。港区内の路線は、昭和42年から昭和44年にかけて廃止されています。

港郷土資料館では、そのような都電の歴史を思い起こさせてくれる資料を、約100点ほど所蔵しています。その中から、2点ほど紹介してみようと思います。

【写真1】は、都電の方向幕(公共交通機関の行先や路線名、運行区間などを表示するために車両に設置される幕)です。現在の国連大学の場所にあった青山電車営業所所属の、都電6系統(渋谷駅前～西麻布～六本木～虎ノ門～新橋)や9系統(渋谷駅前～北青山一丁目～六本木～虎ノ門～桜田門～築地～浜町中ノ橋)の電車で使われたものと思われます。その後、ポリエステル系の素材に変わる方向幕ですが、昭和40年代までは布地に手書きで文字が書かれていました。行先表示器



【写真1】

【写真2】も手動で、乗務員が操作していました。近年では、行先表示器のLED化が進み、方向幕を目にすることも減ってきています。



【写真2】

【写真3】は、都電の停留所名板です。それぞれ、現在もある同名の交差点付近にあった清正公前停留所(4・5系統)と伊皿子停留所(7系統)のものです。この停留所名板は、縦約120cm、横約39cmの大きさがあり、伊皿子のような専用の乗降設備のない停留所では道端の電信柱などに取り付けられていました【写真4】。



【写真3】

これまで、これらの館蔵の都電関係資料は、平成21年(2009)にコーナ



【写真4】

一展「都電 - 港区の路面電車 -」で主だったものを展示したことがあるものの、通常はほとんど見ていただく機会がありませんでした。本年(平成30年)開館予定の港区立郷土歴史館には、「交通・運輸にみる近現代」をテーマとした展示室を設けられます。この展示室には、都電の歴史を紹介するコーナーも置かれる予定ですので、常時何らかの都電関係資料を見ていただくことができるようになります。

## 資料館講座

# 「尾崎紅葉と港区」開催

小澤 絵理子  
(文化財保護調査員)

小説『金色夜叉』などの作者として有名な尾崎紅葉〔慶応3年(1867)12月16日(太陽暦では1868年1月10日)～明治36年(1903)10月30日〕は、港区にゆかりの深い文学者で、誕生から19歳までの前半生を港区内で過ごし、墓所は区内青山霊園にあります。日本で最初の文学結社・けんゆうしや硯友社を結成して明治期の文学を牽引し、売れっ子作家として一世を風靡ふうびしましたが、病のため35年9か月という若さでこの世を去りました。



資料館講座の様子

尾崎紅葉の生誕150年を迎える節目にあたり、平成29年(2017)12月9日に、港区と紅葉のつながりを学ぶ講座を開催しました。

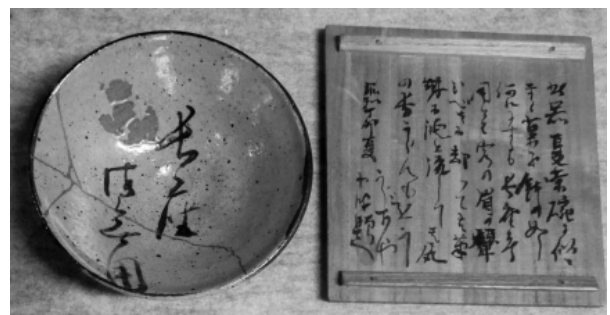
紅葉の作品研究を専門とする、東海大学文学部教授・堀啓子氏の講座、「尾崎紅葉の文学と港区」では、作品中随所に現れる港区内の場所や地域に着目し、紅葉文学の背景となり影響を与えた場所や人々、時代の様相について学びました。



尾谷洋一氏のコレクション

根付研究家の尾谷洋一氏には「紅葉の父・こくさい谷斎について - 人物像と作品の魅力 -」として、芝神明前で暮らしげぼり牙彫職人として著名だった谷斎の紹介と、実際に、尾谷氏のコレクションから谷斎の作品を間近で見せていただくなど、充実した内容の講座となりました。

また、この時期に合わせ、常設展示室内では、岡本一平画「紅葉山人像」や、紅葉が文字を入れたの寒山焼(当時から著名なてんこく篆刻家だった山田寒山作による陶器)の平茶碗など、館蔵の紅葉関連の資料を一部展示しました。



尾崎紅葉真蹟・寒山樂焼「長座御無用」

この茶碗の箱の蓋裏(写真右)には、昭和丁卯(2年(1927))いわや さざなみ巖谷小波の極め書き※があります。小波は、「形は夏茶碗のようでも、また菓子鉢のようでもあるが、いずれであっても、(普通ならば)『長座無用』(=長居はお断り)などと書かれた茶碗を出された客は、眉を顰しか・ひそめて気を悪くするところだが、紅葉の筆と見て、かえって喜び『尻を長く』(=長居)するのも一興だ」という内容の、紅葉の洒落つ気の現れた作品に気心の知れた友人らしい言葉を添えています。

※「此器 夏茶碗に似て/また菓子鉢の如し/何れにするも 長座無/用とは 客の眉の顰/むべき処 却つては 筆/勢に 涎を流して 其尻/の長からんもをかし/からすや/昭和丁卯夏 小波題(印)」

## 親子学習会

# 日本庭園にふれ、ミニミニ石庭（枯山水）を作ろう

鈴木 美和

(文化財保護調査員)

港郷土資料館では、〈見て・さわって・学ぼう〉をテーマに、親子で郷土の歴史に親しむ「親子学習会」を実施しています。この学習会は平成4年(1992)度に始まり、今年度で25年目を迎えました。

過去にもさまざまなテーマを取り上げてきましたが、平成24年度からは「庭園」をテーマに、旧芝離宮恩賜庭園を見学し、お弁当箱サイズのミニミニ石庭を製作しています。今年度は11月12日と26日に実施し、区内在住・在学の小学3～6年生とその保護者14組が参加しました。

1回目は旧芝離宮恩賜庭園に集合し、東京都公園協会ガイド・川鍋義男氏の案内のもと、秋が深まる日本庭園を見学しました。

旧芝離宮恩賜庭園が造られた当時、園内の水は海水を利用していたこと、潮の満ち引きによって景色が変化するよう工夫されていたこと、「西湖の堤」の「西湖」の由来など、庭園内の施設の歴史やその名称の由来等について、川鍋氏に詳しく解説して頂きました。参加者は、写真を撮ったり、配布された子供用パンフレットにメモを取ったり、熱心に見学していました。



見学の様子

2回目は、三田図書館の集会室で、お弁当箱サイズの石庭作りです。最初に、配布された資料とスライドを見ながら、日本庭園と西洋庭園の違い、

日本庭園でも、水を使わないもの(枯山水式庭園)と使うもの(池泉式庭園)といった種類があることなどを、前回の復習も含めて学びました。

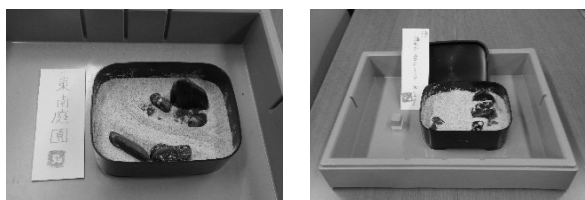
続いて、講師の近藤敏康氏に、石庭作りの全体の流れの説明を聞き、実際に製作します。作る前に、「どんな情景か」「どこから見るのか」「どこから光が入るのか」などの、「全体的なイメージ」を描くことが大切なのだそうです。

実際に製作を始めてみると、思い描いたイメージに合うように、一度石を置いて眺めてみて、微妙に置き直したり、石を埋める深さを変えたりと、お弁当箱サイズではありますが、全員が「庭師」となって、真剣に取り組んでいました。途中、近藤氏から庭づくりの秘伝を教わったり、個別にアドバイスをもらって、丁寧に仕上げていました。

最後に、完成した庭に名前をつけ、短冊に庭の名前と落款印を押して完成です。完成後は、参加者全員の作品をじっくり見て回る「鑑賞会」も行いました。

近藤氏の話では、昨年度までの作品とは、雰囲気異なる作品が多かった、とのこと。昨年度までは3月に実施していた事業ですが、今年度は11月に実施したため、秋の庭のイメージが作品に反映されたのかも知れません。

都内には、ほかにも浜離宮恩賜庭園(中央区)や六義園(文京区)といった歴史ある庭園があります。この学習会をきっかけに、家族で歴史と自然に触れる機会が増えることを願っています。



今年度参加者の作品から

## 刊行物案内

### 『研究紀要 20』(平成30年3月末刊行予定)

『研究紀要』は港区の歴史・文化に係る研究成果を報告する目的で発行しております。今年度は、区内東禅寺に関連する写本『ほんみょういんでんそうせんしよろく本明院殿葬薦諸録』(いなばまさみち臼杵藩第八代藩主稲葉董通の葬儀に関する資料)の紹介、平成29年度に港区指定文化財となった大門の建築・意匠、周辺地域や時代背景等に関する論考、肥後熊本藩細川家屋敷跡第2遺跡から出土した肥後陶器の紹介を収載します。

### 目次

本多寛尚「高輪東禅寺による大名(臼杵藩主)への追悼法語～『本明院殿葬薦諸録』を読む～」  
伊坂道子「芝増上寺大門について 一門前からの定点観測四百年」

駒形あゆみ「肥後熊本藩細川家屋敷跡遺跡第2出土 肥後系陶器について」

(頒布価格未定)

このほか、『増補港区近代沿革図集』『写された港区』など、各種刊行物があります。刊行物は、郷土資料館ホームページに一覧の掲載があります。また、『資料館だより』57号以降のバックナンバーは、ホームページでご覧いただくことができます。

## 事業報告・予定 (平成29年10月～平成30年3月)

### ①親子学習会「日本庭園にふれ、ミニミニ石庭

(枯山水)を作ろう」(全2回)

11月12日・26日

### ②コーナー展「平成29年度新指定文化財展」

11月17日～12月20日

### ③土曜体験教室「古代のアクセサリーを作ろう！」

12月2日・平成30年3月10日

### ④資料館講座「尾崎紅葉と港区」

12月9日

港郷土資料館では、港区の歴史や文化に関する資料を探しています。これらの資料をお持ちの方で、ご寄贈いただける場合や資料調査にご協力いただける場合は、当館までお知らせください。

### 港区立港郷土資料館の利用案内

**交通** JR「田町」駅下車徒歩5分、都営地下鉄「三田」駅下車(A3出口)徒歩2分  
都営バス「田町駅前」停留所下車徒歩2分、港区コミュニティバス(ちいばす)  
「田町駅前」停留所下車徒歩2分、「田町駅西口」停留所下車徒歩3分

**開館時間** 9:00～17:00(火・金・土曜日の  
12:30～16:30には、土器等にさわ  
れる展示コーナーを開設しています)

**休館日** 日曜日・祝日・第3木曜日・年末年始・  
特別整理期間(臨時休館などはHP  
等で随時お知らせします)

**入館料** 無料



『資料館だより』第81号

平成30年(2018)3月1日発行

編集・発行 港区立港郷土資料館

〒108-0014

東京都港区芝5-28-4

Tel. 03-3452-4966

Fax. 03-5476-6369

<http://www.lib.city.minato.tokyo.jp/muse/>

刊行物発行番号 29153-7541